

日付:2016年5月29日／聖書:ヨハネの黙示録22:6～17

説教:「見よ、わたしはすぐに来る」

ドナル・ドール著の『時代が求めるキリスト者の生き方』という本がある。彼は「解放の神学」を主張する者の1人で、貧しい地域の中で、社会の抑圧に喘(あえ)ぐ人々の解放を求め、訴える中かに主は居られ、キリストもまたその苦難の人々の1人として伴ってくださると説く。著者は、ミカ書6章8節の御言葉を用いて、キリスト者は(教会は)「どう生きる者なのか」を記す。それは「正義を行うこと、慈しみ愛すること、へりくだること」の3つ。それが欠けてもいけないという。しかしどうしても教会は、特に社会との関係、「正義を行う」という部分では、乏しいと言わざるを得ない。

以前、米軍との土地闘争で18年間闘った阿波根昌鴻さんがこんなことを教会に投げかけていた。「友を求めて」という文章がある。阿波根さんは、17歳の時にクリスチャンになっていたと言うこともあり、米軍との土地闘争で「友を求めて」教会に助けを求めた。しかし、教会はそのことに耳を貸そうとはしなかった。「あなた方はこの教会の信者ではないから」、また教会はそういう社会問題には関わらないものと言われる。阿波根さんは大変幻滅する。「教会は、キリスト者は、聖書・賛美かも大切であります、歴史と政治を学ぶことも大切だと思います。キリスト者が多くなっても戦争をくいとめた例を聞かないのはどうしたことか、なぜ貧富の差が広がり、犯罪者があとを絶たないのか。キリスト者は、政治・経済・歴史・哲学・法律すべてを勉強しなければ、キリスト者としての資格はないと思うようになりました。・・・」。この問いは、教会は、聖書の言葉がどう現実社会の出来事と兼ね合わされて行くのか、どう現実社会の中で御言葉を聞いてきたのか、ということであろう。

黙示録の教会は、ローマ帝国の統治下で皇帝崇拝を強いる状況の中で、皇帝は神ではないと、誤った社会情勢の中で、御言葉に立った。それは非常に緊迫した状況であり、必死になって社会と神に向き合ったという事である。「見よ、わたしはすぐに来る」というイエス・キリストの言葉が、どんなにか幸いなこととして聞いてきたか。沖縄の社会情勢はまさに緊迫した状況にある。

教会は、《アルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである》という主なる神が、全てを治め、全ての時に共におられることを信じて歩ませて頂きたい。(神谷)